Title	プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論
Author(s)	中澤,務
Citation	北海道大學文學部紀要, 42(2), 49-72
Issue Date	1994-01-27
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/33623
Туре	bulletin (article)
File Information	42(2)_PR49-72.pdf



プラトン『テアイテトス』 第二部における虚偽不可能論

中澤

70

ていくのである。 働きを「思いなし」として定位する。そして第二部は、この「思いなし」というこころの働きを中心に議論が展開し 到達されるものなのである。ここにおいて知識は、感覚とは異なったこころの働きに求められ、テアイテトスはこの ちに存するのであるが、これは感覚によって達成することはできず、こころが自分自身で考察をおこない、その結果 題の焦点は スの第一定義が議論の俎上に乗せられ論駁されてきたが、第一定義の最終的な論駁(184b4-186e12)によって、問 いて、プラトンは「思いなし (doxa)」を問題にしている。第一部においては、知識を感覚と同一視するテアイテト テアイテトス篇は、「知識(epistēmē)とは何か」を主題とした対話篇であるが、その第二部(187b-201c)に 「感覚 (aisthēsis)」から「思いなし」へと移行してくる。すなわち、知識は「ある (on)」の把握のう

北大文学部紀要

提出する(これを「第二定義」と呼ぶことにする)。彼は「思いなし」に「真なる」という限定を付加しているが、 うにみえる。しかし、プラトンが第二定義を無視して、それとは全く異なった別の議論を始めたとは思えない。 なる思いなし」のアポリアに対する解決の試みが失敗に帰した後の簡単な議論によって(201a4-c7)に過ぎないよ う虚偽不可能論のアポリアなのであり、「真なる思いなし」が議論の前面に取り出されて論駁されるのは、この かしこの予想に反して、実際に第二部の議論の大半が費やされるのは、「偽なる思いなし」は成立不可能であるとい とすることはできず、そのうちの真なるものが知識に違いないと彼は主張するわけである。このように、「真なる思 それは、「思いなし」には虚偽のものも存在するという理由による。したがって、全ての「思いなし」を知識である 大の鍵であろう。 両者の間にはいかなる関わりがあるのか。その理由を明らかにすることがテアイテトス篇第二部の謎を解くための最 いなし」という定義が提示された以上、当然、議論はこの第二定義の当否を巡ってなされるものと予想されるが、 第二部に入ると、テアイテトスは知識の新たな定義として「真なる思いなし(hē alēthēs doxa, 187b5)」を では

と同種のアポリアが立ち現れてしまう。その後、第一のアポリアを解決するために二つの解決の試みがなされるが、 よっても虚偽不可能論を解決することができないまま、議論は再びアポリアに陥る。ソクラテスはこの解決として「思 い違い (allodoxia)」という概念を導入し、これによってアポリアは解決されたかに見えたが、再び第一のアポリア に陥る。次に、このアポリアから抜け出すために、「ある」「あらぬ」を使った新たな解決策が提示されるが、これに よって構成されている。まず最初に「知っている」「知らない」を使った虚偽不可能論が提示され、 第二部の議論は、ソクラテスによるアポリアの提示と、そのアポリアから抜け出すためのいくつかの試みに 議論はアポリア

私の知る限り全ての注釈家達が、 部の行き詰まりの主要な原因は、 結局このアポリアを解決できないままに終わってしまうのである。以上の議論の流れをみれば明らかなように、 第二部の行き詰まりの原因をこのアポリアの中に求めている。 最初に提示されている「知っている」「知っていない」によるアポリアである。 したがってこの

我々はまずこの第一のアポリアを詳細に検討しなくてはならないであろう。

を解決するためには、

のを、 を思いなすことの可能性を潰していくのである。 の知っているものであると思う」、(二)「知らないものを、 て する)、この二分が、「思いなす者は、知っているものどものうちの何かを思いなすか、 の かを思いなすかのいずれかである(188a7-8)」というかたちで「思いなし」に適用される (これを邸とする)。 は 「偽なる思いなし」がこれらの組み合わせとして四通りに分類される。すなわち、(一)「知っているものを、 別の知らないものであると思う」、(四)「知らないものを、 のアポリアは以下のようにして導入される。まず、「全てについて、また、 知っているか知らないかのいずれかである(188a2)」という知と不知の二分の前提が同意され ソクラテスはこれらの場合分けのそれぞれが成立不可能であることを主張することによって、 別の知らないものであると思う」、(三)「知っているも 別の知っているものであると思う」という四通り その各々について、我々に可能 知らないものどものうちの何 別

て説得的であったのか (すなわち、作者プラトンにとって説得的であったのか、あるいは、プラトンみずからはコミッ 定の人間にとって説得的な何らかの特殊な前提が潜んでいると考えている。従って問題の焦点は、この議論が誰にとっ 以上の議論は誰にとっても説得的であるとは決していえない。実際、多くの注釈家達は、このアポリアの中には特 "ソクラテスあるいはテアイテトスにとって説得的なものとして提示しているのか)、そしてそれ

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

ようなアポリアが登場したのかという理由もおのずから明らかになるであろう。 が説得的であった理由は何なのか、という点に集中する。そして、これが明らかになれば、 なぜ第二部においてこの

の理解の仕方を精確に反映したものなのだと考えられる。そして、そうであるとしたら、このアポリアはテアイテト 能論によって提示されているような「思いなし」の定式化そのものが、「真なる思いなし」についてのテアイテトス ポリアは、テアイテトスの提出する第二定義そのものの中に潜在するアポリアなのである。すなわち、この虚偽不可 ス自身のアポリアであり、このアポリアがアポリアのままに終わることによってあらわにされるのは、「思いなし」 これに対する私の解釈は、このアポリアはテアイテトスにとって説得的なものであったというものである。このア

に対するテアイテトスの理解の不十分さであるということになるであろう。

このアポリアをプラトンに帰属させようとする見解が根強いのも確かである。そこでまず、 従来の解釈の

検討から始めることにしたい。

格闘しているのである。(2) 注釈家達の多くはこのアポリアの原因をプラトン自身に帰している。彼らによれば、第二部においてプラトンは、 | に関して彼自身が持っている特殊な理解ゆえに、みずから虚偽不可能論の罠に落ち、そこから抜け出そうと このような読み方について、 我々はまず、代表的な解釈の一つであるマクダウェルの解釈に (3)

即して検討することにしたい。

以外の判断を考慮に入れれば、この説明は成立しなくなるとマクダウェルはいう。 二つの項の間の同 判断という特殊な判断だけを対象にしたものであるのに、これを判断一般に拡張するのは不当であるというのが それについて マクダウェルによれば、プラトンは「思いなし」を、「xはy(と同一)である」というかたちで、つまり、 $\frac{1}{1}$ 性を問題にする同一性判断として理解していた。プラトンは、この同一性判断をモデルにして、 (四) が不可能であることから、虚偽の判断は不可能であると結論した。 つまり、 プラトンの分析は同 しかし、 同 一性判断 一性

クダウェルの指摘する問題点の一つである。

と(knowledge of x)」を「xが何であるかを知っていること(knowledge of what x is)」を同一視する傾向が潜ん ことになってしまったとマクダウェルは説明する。しかも、プラトンのこの扱い方の背後には、「xを知っているこ ような弱いものではなく、対象に対する完全な知識なのである。結局、プラトンは、思いなしの成立に必要とされる ラトンが す場合と、知らないものを思いなす場合を問題にするとき、知識について特殊な考え方を前提しているのである。プ を持っており、 (三)(四)をも支配している。ところが、プラトンにとってこの知識は、 だが、 がを思いなしているなら、彼はそのものを知っていなくてはならない」という原理が含意されており、これが(一) 「見知って」いること(acquaintance)を意味している。マクダウェルによれば、この(二)には、「もしひとが このような マクダウェルによれば、 において、「知らないもの」は思いなすことすら不可能であると主張するとき、 それが虚偽不可能論の究極的な原因となっている。 「見知り」モデルで考えてしまったために、 問題はこれだけにとどまらない。 知識というものを all-or-nothing matter として扱う すなわち、プラトンは、 彼によれば、プラトンはこれ以外にも暗黙の前提 単に思いなしの対象を特定できればよい 知っているものを思い 彼は、 対象を直接的

でいるとマクダウェルは指摘するのである。

ろう。 拠になるとは思えない。彼はこれをあくまで一つの例として提示しているにすぎないと考えることは十分に可能であ 断を例として挙げている。しかし、このことがプラトンが全ての判断を同一性判断に還元して理解していたことの証 再検討しよう。確かに、(二) 以上のマクダウェルの解釈は説得的なものといえるだろうか。 の定式化においてソクラテスは、「ソクラテスはテアイテトスである」という同 我々はまず、 同一性判断についてテキストを 性判

合を考えてみよう。このとき、拒絶されている不可能事というのは、「テアイテトスは醜い」と知っていながら、 て述べられている二つの いう二つの対象についての完全な知識が要求されなくては虚偽の可能性は残ることになる。たとえば、(一) におい を述語にしたかたちで理解しなくてはならないものではない。確かに、 必ずしも考える必要はない。(一)の定式化は、「知っているもの(a)を、それであるとは思わずに、 うなものではない。同一性判断の例が登場するのは(二)においてであり、この例が(一)の説明を支配していると るもの(b)であると思う」というものである。この定式化は、「『aはbである』と思う」といった、 そもそも (一) ー 性判断をしているのだと考えるような場合には、そのような知識が要求されるかもしれない。だが、この定式化 「(実際にはaであるものを)『aである』とは思わずに『bである』と思う」というふうに解釈することも可能 たとえば、「テアイテトス」について「醜い(a)」ではなく「美しい(b)」と誤って判断してしまった場 (四)のソクラテスの「思いなし」の定式化は、必ずしも同一性判断としてしか理解できないよ 「知っているもの」を、「ソクラテス」と「テアイテトス」のように理解し、 もしこのように理解するとしたら、 両者について a を主語 別の知ってい b ح b

うに思われる。というのは、ソクラテスがここで強調しているのは、 ここでソクラテスがいいたいのは、「知が関わりうる全ての事柄について」ということであり、 に適用可能であるということであり、この panta が全ての「個物」を意味すべき必然性はないからである。 の知識に背いて「テアイテトスは美しい」と判断してしまうような事態であると理解することができるであろう。 ここで、ソクラテスは「知っている」の対象を何らかの「個物」として措定しているではないかという反論がある しかし、(A)の提示においてソクラテスがそのような措定を行なっているとは必ずしもいえないよ 知と不知の二分が「あらゆる事柄 (panta)」 この事柄のうちには

単に「個物」だけではなく命題的な知も含まれうるのだと考えた方が文脈に適合していると考えられる。

<u></u> せることによって、 なしが関わっている対象が「ある」ものであることを容認しながら、その「ある」に「別のもの」という性格を負わ 解決案として「思い違い)」という概念を導入し、これによってアポリアを回避しようとする。これは、我々の思 に思われる。「ある」「あらぬ」による分析が失敗した後、ソクラテスは、この「ある」「あらぬ」によるもう一つの (allodoxia)」の議論(189b10-190e4)におけるソクラテスの定式化は、明らかにこのような読みを許容するよう なのであり、 確かに我々は「ある」ものを思いなしているのであるが、実はそれは、「(本来思いなすべきものとは) 別のも 以上のような解釈の可能性は最初のパラドクスに限られるものではない。たとえば この「別のもの」を捉えているという点において、彼は虚偽を犯しているといえるわけである。 虚偽の可能性を確保しようとするものであるといえるだろう。すなわち、我々が虚偽を思いなす

クラテスは、このアイデアを以下のように説明している。

そして、狙っていたものを逸している以上、虚偽を思いなしていると正当にいいうるであろう。(189b12-c4) とき、彼は常に、「あるもの」を思いなしているのであるが、一方のかわりに他方を思いなしているのである。 あるものどものうちの何かを、あるものどもの別のものと、思考によって取り違え、(そうであると) 我々は(この)何らかの思い違いを偽なる思いなしと呼ぶのである。というのは、このような

り、 けである。ここで判断は、二つの項の間の同一性判断ではなく、むしろ、何かについて何らかの主張をすることであ(5) 彼は何かについて何らかの真なることを主張しようとしたのだが、「思考によって」、誤ったものを捉えてしまったわ ではなく、「テアイテトスは美しい」という判断をしているのである。一方の項(「醜い」)は判断者には現れてい つもりなのであるが、しかし、「狙っているものを逸して」しまっているのである。 て取り違え、「醜い」のかわりに「美しい」という、反対の「ある」を捉えている。確かに彼は、真実を述べている すなわち彼は、テアイテトスについて「(美しいもので) ある (einai)」と思いなしている。しかし彼は、思考によっ しい」という虚偽の判断において、確かに判断者は、「あるものどもの一つ」つまり、「美しい」を思いなしている。 この解釈において注目すべきは、判断者は二つの対象について同一性判断をしているわけではないということであ ここでソクラテスが主張しているアイデアは、以下のように解釈することができる。例えば、「テアイテトスは美 その主張について取り違えをしたわけである。したがって、「別のものを思いなす」という文脈で虚偽が語られ 判断者は確かに「醜い」と「美しい」を取り違えているが、しかし、「醜は美である」という判断をしているの

るとき、少なくともこの語り方の中には、同一性判断を含意するものはないのである。

クダウェルのいうような見知り知を考えざるをえない。しかし、ここでそのような特殊な知識概念が登場していると トンはこのような対象に関する同一性判断としての虚偽の思いなしを否定しているのだと考えるなら、どうしてもマ として考える必要性から解放されるだろう。反対に、もしここでの知識の対象を非命題的な対象として理解し、 もし以上のような解釈が許されるとしたら、我々は、ここでの「知っている」を、マクダウェルのような見知り知 ブラ

方がよいのではないだろうか。 絶対的なものとはいえないように思われる。むしろ、我々は(A)の二分法が説得的になりうる別の見方を模索した う考え方は、必ずしも十分に説得力のあるものとはいえない。また、ソクラテスの定式化に対する理解も、 以上のように、ソクラテス自身の説明の中に虚偽の可能性を塞いでしまうような暗黙の前提が含意されているとい 必ずしも

は思われないのである。

<u>=</u>

偽不可能論ににすぐさま同意してしまう理由も説明することができる。この議論が彼にとって受け入れやすかったの のアポリアを投げかけたのではないか。もしそうであるとしたら、 不可能論を帰結してしまうような考え方が存在していたからこそ、 テアイテトス自身のアポリアなのではないだろうか。すなわち、第二定義を提出したとき、テアイテトスの中に虚偽 以上の解釈は、 アポリアの原因をプラトン自身に帰していた。 しかしむしろ、 我々は、テアイテトスがソクラテスの提示する虚 ソクラテスはテアイテトスに対して虚偽不可能論 虚偽不可能論のアポリアそのものが

は、彼の中にそれを受け入れさせる素地が存在していたからだと説明しうるからである。

あり、 張する。彼女によれば、テアイテトスはこのような考え(強い見知りモデル)を暗黙の前提として持っており、(6) が虚偽不可能論の原因になっているのである。彼女によれば、この前提は第二定義が成立するための十分条件なので を知っているか、 らないかのいずれかである」というソクラテスの言葉は、「ある対象Xについて、ひとはそれについての全てのこと の解釈を見ておこう。 このような視点から第二部を見ることは、 したがってプラトンは議論をアポリアに導くことによって、この前提を却下しようとしているのである。 (マ) あるいはまったく何も知らないかのいずれかである」という意味に理解されなくてはならないと主 ファインは、「全てについて、また、その各々について、我々に可能なのは、 すでにファインによっておこなわれている。 そこで、 次にこのファイン 知っているか知 これ

ない。 デルをテアイテトスに帰属させるどれほどの必然性があるのだろうか。 い見知りモデルをプラトンではなくテアイテトスに帰属させるところに存している。だが、このような強い見知りモ る以上、 について all-or-nothing matter を帰結するような知識をアポリアの根底に想定しているからである。 な考えを示唆するような証拠は全く現れていないのであり、 トスがこのような前提を持っていたとしたら、この前提によって虚偽不可能論が生じるのは当然といわなくては アポリアの原因についての彼女の考え方は、明らかにマクダウェルと軌を一にしている。というのは、 というのは、 その対象についての判断を誤る可能性は原理上否定されてしまうからである。 このとき、 判断者が何かについて判断するときには、その対象について全ての事柄が知られ したがってテアイテトスがそのような知識観を抱いてい 少なくとも対話の表面を追う限り、 彼女の革新的な点は、 確かにテアイテ 彼女も対象 てい ななら

ることを確信させるような外的な証拠を見いだすことは不可能なのである。

真であるという結論は決定的に明白なものになってしまうように思われるからである。 れがファインの主張するような強い見知りモデルであるということには疑義を呈さざるをえないであろう。 する背景には、 るとしたら、 提を措定すれば、 彼女はこの見知りモデルが、第二定義の成立のための十分条件であると主張している。確かに、このような強い 偽なる思いなしの存在を確かに認めているのである。もしテアイテトスがこの強い見知りモデルを抱いてい そもそも彼がこの可能性を認める筈がない。 テアイテトスの側に何らかの問題が存しているという考え方は基本的に正しいと思われる。 その中には第二定義も含み込まれるであろう。しかし、テアイテトスは最初の提示(187b4-7)に というのは、これが措定されるだけで、全ての思いなしは 確かに、このアポリアが登場 だが、

いて、「真なる思いなし」についてのテアイテトスの理解の不十分さを突いていることになるであろう。 ここからアポリアが生じてきてしまうことは十分に考えられる。もしそうであるとしたら、プラトンはこの議論にお 思いなし」とはいかなるものであるのかについてのテアイテトスの考え方がそもそも不十分なものであったとしたら、 ると考えるべきであるように思われる。これまで注釈家たちは(A)における「知っている」の意味にとらわれてき 以上のファインの解釈は、 むしろこのアポリアは、「知識」というよりも、「真なる思いなし」についてのテアイテトスの理解に依存してい しかしそのように考えると、テアイテトスの第二定義との繋がりが見えなくなってしまう。だが、もし「真なる アポリアの原因を(A)の背後にある、知識についての特殊な理解に求めてい

駁(184b4-186e12)の結果、 なし」には偽なるものも存在する。 以下のような推論に基づいて第二定義を導出している。 知識は「思いなし」の中に求められるべきであることが明らかになった。 したがって、 知識とは「真なる思いなし」であるに違いない (187b4-7)。こ すなわち、第一 定義に対する最終的 しかるに「思 な論

北大文学部紀要

のように語る。「思いなしには二つの姿があって、一つは真なるもののそれであり、他は虚偽なるもののそれである かということに対する反省が欠けているのである。ソクラテスは、このテアイテトスの考え方の提示を受けて、 ていない。この点で、 の推論において、テアイテトスは「真なる信念」とはそもそもいかなるものであるのかについての反省を全くおこなっ 本的な立場なのではないかと考えられる (cf. 200e4-6)。 言葉が意味しているのは、 から、その真なる思いなしの方を知識だと定めるというわけなのかね。(187c3-5)」ここでの「姿 (idea)」という それを「知識」として定め、 彼の考えには、「思いなし」がいかなるものであればそれは「真なる思いなし」と認めうるの 外的な「見え」ということであろう。結局、「思いなし」が「真」という外的な見えをみ その内的な構造の差異は一切考慮に入れないというのが、テアイテトスの基

の理解するようなものである限りにおいてなのであり、 で「偽なる思いなし」が存在しないというアポリアが立ち現われてしまうのは、「真なる思いなし」がテアイテトス イテトス自身にとっての「真なる思いなし」がいかなるものであるのかを提示しているのではないか。 このことがその後のアポリアの議論で問題になっていることなのだと考えたい。すなわち、このアポリアは実はテア テアイテトスは当の「真なる思いなし」そのものをどのようなものだと考えているのだろうか。 ソクラテスがおこなっているのは、テアイテトスに対する つまり、 私は、

ほのめかしているという事実である。(8) 完全知」が前提になったものではなく、実は「思いなし」についてのプロタゴラス的な理解 (cf. 165e7 ff.) に由 このような視点から問題を見るとき、 つまり、「思いなしが真である」という事態についてのテアイテトスの理解は、 興味深いのは、ソクラテスがこのアポリアを提示する際、プロタゴラス説を ad hominem な議論ではなかっただろうか。

来するのではないだろうか。

次の章では、 従来の解釈に対する批判を踏まえつつ、第一のアポリアがこのような視点から理解できることを明

DE

だが、このような排中律がもっともらしくなるのは、「見知り」という前提に立ったときのみなのだろうか。 トスの応答を見れば明らかなように、彼が(A)をもっともらしいと考えたのはこれが排中律であるがゆえである。 テスの語り方は、そのような特殊な意味を全く前提していないようにみえる。もちろん、 188a5-6 におけるテアイテ 家たちは、この知と不知の二分の中に「知っている」ということの特殊な意味を見てきたのである。しかし、 ソクラテスの前提(A)は、これまで虚偽不可能論発生の根本的な原因と考えられてきたものである。すなわち注釈 第一のアポリアの提示において、まずソクラテスは知と不知の二分という前提(A)を唐突に導入してくる。

象となりうる全ての事柄を含んでいると考えられる。そこに命題的なものが含まれることは、 テスの言い方(188al-4)をみればわかるように、ここで「知っている」「知らない」の対象となるのは、 ていることになる。そして、個物についての知に限定されるという想定をしなければ、「知っている」「知らない」に ように思われる。 この「知っている」「知らない」の対象は、すでに見たように、見知りの対象(個物)のみに限られない。 したがって、ソクラテスは、想定されうる全ての事柄について、知と不知の二分を適用しようとし 基本的に排除されない 知識の対 ソクラ

北大文学部紀

対するある理解のもとでは、この二分法はありそうなものになるように思われる。

きる。 あろう。 いる」か「知っていないか」の二分法の適用は、確かにありそうなものになるといえるだろう。(᠀) 存在していないときには、「知らない」といわれるのである。このようなかたちでのさまざまな知について、「知って ているのは、このような判断の基礎になるような、あらかじめ判断者の中に存在している何らかの知であると理解で もとにして判断を下すという考え方は、判断の成立の定式化として常識的なものであろう。(A) において記述され た見知り的なものから、「テアイテトスは醜い」といった命題的なものまで含まれうる。そして、このようなものが が存在するとき、(A) はこれを「知っている」状態として措定する。ここには「ソクラテス」、「テアイテトス」といっ では、それはいかなるものなのだろうか。判断者の中にはすでに何らかのかたちで知識が存在しており彼はそれを 確かにこの意味においてであれば、 彼はこれらのさまざまな知識をもとにして判断を下す((B))。判断者の中に何らかのかたちで形成された知 判断者はさまざまなものや事柄をあらかじめ「知っている」ともいえるで

を否定していく。まず彼は、 の構造がまず確認される。ここから、ソクラテスは四つの場合分けを行ない、それぞれの場合において虚偽の可能性 以上のように、 判断者の中にすでに存在している知と、それをもとにして成立する「思い」という、 判断が「知っているもの」のみによって構成される場合を考察する。 「思いなし」

たように、これを二つの対象についての虚偽の同一性判断(「aはbである」)として理解する必要はない。むしろソ ているからには、それを、 「同一のものを知っていて、 ソクラテスは以下のように議論する。「知っているもの」については、虚偽を思いなす筈はない。というのは、 別のものと考えることはないからであり、もしそのような事態が生じたとしたら、それは かつ知らない」状態なのであり、そのような事態は成立しえないのだからと。すでに見

と見なされてしまうのだと考えられる。 ちろん、ここで判断者があらかじめ持っている知の身分が当然問題になりうる。というのは、このような「知」によっ ば、テアイテトスについて、 からである。 を持つのであり、 のとき判断者は ているもの」が思いなしの中に登場するときとは、単に「aだ」という思いなしが成立しているときなのであり、 クラテスが述べていることは、 ないのであり、 判断者にとって無矛盾的な思いなしが成立したとしても、それが必ずしも真なるものであるとはいえないだろう しかるに、この議論においては、この点が全く考慮に入れられず、自動的にそれが その知に逆らった判断をあえておこなうことはしない」という意味に理解可能である。つまり、 その知に逆らった「テアイテトスは美しい」という思いなしをもつことは決してないのである。も それとは異なった「bだ」という思いなしに至ることは決してないということなのである。 彼が醜いということを知っていれば、 「判断者が何かを知っていたら、知っている通りにそうであると思いなすに違い 判断者は「テアイテトスは醜い」という思いなし 「真なる」思いなし たとえ

それは判断者の中に「知」があるかないかという視点から見られていた。判断者の中に、それに相当するような何ら と考えることができる。 か えないという理由によって、虚偽の可能性は簡単に拒絶されてしまっている。これは、 のである。 の状態が成立すれば、 かなる情報も存在していないような状態として理解することができる。(A) において二分がおこなわれたとき 「知らないもの」についてはどうだろうか。ここでは、「知らないもの」についての思いなしはそもそもあり このような観点から考えるとき、「知らない」とは判断者の中にそのような情報が存在していない状態 そして、 それはすなわち「知識」 このように考えるならば、「思いなし」の中に「知らないもの」が入ってくるとき が存在するのであり、成立していなければ 判断者の中に、 知識」 は存在してい 知識としての

ソクラテスの取り扱いが全く冷淡である理由も理解できるのではないだろうか。

思っている」と記述することが可能である。このとき、我々は、彼が「知っている」と思っている事柄を、(実は)「知っ 機能していないのである。このような視点から「思いなし」を見るとき、ソクラテスの提示するディレンマの枠組み ていない」事柄として記述している。すなわち、このような記述のもとでは、知と不知の二分という前提そのものが このようなものにはならないことは明らかであろう。 我々が虚偽の思いなしを抱いている判断者を観察して、その状態を記述しようとするとき、その記述は 我々は、彼が実際には真実を「知っていないのに知っていると

真なる思いとして立ち現れる。というのは、彼はみずからの内部の知に対して従順に判断をなしたのであり、 の記述であるように思われる。(10) そのものが破れてしまうことになるであろう。 のであり、また、その知に逆らうような真似はしないからである。つまり、「思いなし」の成立構造を判断者の側にたっ 理解しようとする立場にとって、この虚偽不可能論の論理は説得的なものになるように思われる。 すなわち「知っていない」などとは、よもや考えないであろう。そして、このような、「思い」を知識に関連付けて ような立場では、「思い」という確信を持っていることが、「知識」を持つということと同義なのであり、 「思い」の成立構造と「知識」の成立構造とは何ら差異化されていないのだと理解することができるからである。 知っているものを当の知っているものだと思っているからである。 たがって、ソクラテスの提示している「思いなし」の記述は、むしろ、「思いなし」を判断者の側から見たとき る人間にとって「不透明な要素」は存在しない。 自分の思いなしに内的な確信の感情を抱いている判断者にとって、 彼はみずからの「知っている」ものをもとに判断を下す したがって、 彼は、 自分の判断が誤っている みずからの思い というのは、 その意味で あくま この

ことになるのではないだろうか。そして、このような立場にたって「真なる思いなし」を理解するとき、テアイテト ス自身のおこなっている「真なる思いなし」と「偽なる思いなし」との差別化にも関わらず、「思いなし」は全て真 いるのではないだろうか。そして、もしそうだとしたら、彼はいわば「思いの論理」といったものにとらわれている テアイテトスはこのような内的確信に到った状態を「真なる思いなし」として理解し、それを「知識」と同一視して て見ていくとき、 彼が「別のもの」を思いなすということが不可能事として立ち現われてしまうのである。そして、

五

であるというアポリアが登場して来てしまうのだと考えられる。

化では明らかな差異が存在する。すでに見たように、最初の定式化は不透明性を許容するものであるのに、後の説明化では明らかな差異が存在する。すでに見たように、最初の定式化は不透明性を許容するものであるのに、後の説明 として再びアポリアに陥ってしまう。 でに見た (二章)。 しかし、実際にはこの解決は、これに対するテアイテトスの賛意の表明(189c5-7) をきっかけ ステス篇で提示されているような解決の方向を示しており、虚偽の説明として成立しえていると理解しうることは - 思い違い」についてのソクラテスの説明が、単に二つの対象の間の同一性判断を問題にしているのではなく、 テアイテトスが以上のような論理にとらわれているということを示す証拠が他にもいくつか存在する。これらのう ファインが正しく指摘しているように、このテアイテトスの言葉以前の「思い違い」の定式化と、それ以後の定式 もっとも決定的だと思われるのは、「思い違い」モデルによる解決の試みが再びアポリアにおちいる箇所である。 問題は、 この前後でいかなる変化が起こったかということである。 ソピ

北大文学部紀

提示されているのである。 が可能であったが、これに対し、 れているのに対し、 しい」というというものであり、 ではそれを許容しないのである。 後者においてはその事実が判断者にそのまま立ち現れてしまっているのである。 つまり、前者の説明においては、テアイテトスが実は醜いということは判断者にとって隠 それ以後の説明においては、思いなしは「醜いものが美しい」といったものとし 判断者はテアイテトスについて「美しい」と「醜い」を取り違えているという解釈 すなわち、 ソクラテスの説明においては、 成立する思いなしは「テアイテトスは美

となのだと考えられる。(12) にいたる過程であり、 思考とはこころが自分自身に対しておこなう問答にほかならない。そしてこの問答の結果、こころの述べることが同 あるという確信を抱くようになる。ソクラテスがここで語っている判断者の「思いなし」とは、このような状態のこ とはないであろう。 分裂状態が存在する限り、 一となって分裂がなくなるとき、それが「思いなし」と呼ばれるのである。ここで記述されているのは 「こころが自分自身とおこなう対話」として提示される「思いなし」の説明である(189e4-190a7)。それによれば では、このような違いをもたらしたものは一体何だったのだろうか。この点で注目すべきはソクラテスによって、 しかし、 このソクラテスの説明は、 すなわち自分の考えの矛盾をみずから意識している限り、 みずからの内部にそのような分裂が感じられなくなったとき、彼はそれが正しい考えで 判断者が確信の念にいたりつく姿を描写している。 彼が何らかの確信の念を抱くこ 判断者の内部に 一思いなし」

が矛盾的な判断を下すことは考えられない。 テアイテトスはこのような確信の状態を「思いなし」として認める。 190b2-8 で述べられているように、 「美しいもの」として把握している対象を、 したがって、このレヴェルだけから見るとき、 「醜い」と考える筈はない。 すなわち、 このレヴェルにおい 判断者にとっての不透明 判断者は て彼

性は、 スにとって誤りのない 彼の「思いなし」の記述の中にはあらわれてこないのである。そしてこのような確信の状態こそ、 「思いなし」すなわち「真なる思いなし」にほかならないのではないだろうか。(ヨ) テアイテト

偽の思いなしの可能性そのものを原理的に塞いでしまうものだったのである。 あったのかを物語るものだからである。 能なものたらしめている「思いの論理」は、まさしく、テアイテトスにとって「真なる思いなし」がいかなるもので ころの もし以上のように理解することが許されるなら、 「真なる思いなし」を巡るものであったといえるように思われる。 すなわち、 実は第二部の議論は、 テアイテトスにとっての というのは、ここで虚偽の思いなしを不可 まさしくテアイテトスの第二定義であると 「真なる思いなし」そのものが、 実は虚

ナ

よりも注目すべきなのは、 にみた。このソクラテスの説明は、 この論理を打破することができなかったと考えるべきなのであろうか。最後にこのことについて一瞥しておきたい。 てしまうのもこのためであると理解できるだろう。では、ソクラテスはどうなのだろうか。我々は、 第二部において、 思い違い」によるソクラテスの虚偽の説明が必ずしもこの論理にとらわれているわけではないということはすで これ以後、 最初のアポリアが再登場し、 テアイテトスはこのような論理に捉えられている。 「計算間違い」を巡っての議論である。 これに対するテアイテトスの理解ゆえに再びアポリアにとらえられてしまう。 議論はこれを巡って進行することになる。この議論において我々が何 この議論において「5+7」を「11」だと思いな 対話が第二部の終りで結局アポリアに終わっ 結局プラトンも

のような者は、「12」の代わりに「11」を思いなしているとはいえるが、「12を11だと思いなしている」とは決してい 12 を「11」と思いなす者として理解されている。 しかし、これは誰が見ても誤った想定だといえる。

考えることもまた可能であろう。この例において、判断者のなかに「11だ」という思いしか存在していないのは明ら えないのである。 かである。にも関わらず、ソクラテスの記述の仕方においては、「12」が彼の思いの記述の中にそのまま姿を現して いる。このような記述をおこなうことによって、プラトンはアポリアを導いた考え方が実はいかなるものであったの あからさまに不合理な考え方をソクラテスが提示している理由を、プラトン自身の無理解に帰するこ しかし、このような例の提示によって、プラトンが読者に問題の核心を示そうとしているのだと

この11と12の逆転がプラトンの単なる筆の滑りだとは考えられない。むしろ、この二つの「思いなし」は、実は同一(16) を得てしまった以上、 思う」 ことのことの不可能性が問題になっているという事実である。そこでテアイテトスは、ひとが思考のうちに「11 かを読者に示そうとしているのではないだろうか。 虚偽の例を持ち出す。そして、これ以後は、「12であるものを11であると思う」ことの不可能性が問題になるのである。 で矛盾のない思いなしを持っているといえる。ソクラテスはこのテアイテトスの主張に対して「7+5=11」という である」と把握しているものを「12である」と思うことは不可能であると主張する。すなわち、「11だ」という把握 ことの不可能性が問題になっていたのに対し、その直前の文脈(195e)においては、「11であるものを12であると この点で興味深いのは、この「7+5=1」という計算間違いの例においては、「12であるものを11であると思う」 判断者の中に分裂がないかぎり、彼はそれが「12だ」という判断はしないのであり、その限り

の事態を別様に記述したものなのではないかと考えられる。

が、 が、 と思いなす」と言い替えることによってプラトンは、テアイテトス的な「思いなし」の記述に決定的に欠けてい てはならないのである。 対し、ソクラテスの提示においては、そこに「12」がそのまま、むきだしのかたちで登場してくるからである。 は ように理解するかという点にかかってくる。 とを示唆しようとしているのだと考えられる。従って、問題は「12であるものを11であると思う」という記述をどの ないだろうか。 「12」という(判断者には見えていない)正しい答えという視点であり、ここに不透明性が現れているというこ それに逆らった「12」だという思いなしを持つわけはないというところで「思いなし」が問題になっていたのに が真であるか偽であるかを問題にするためには、まさしくこの点を「思いなし」の記述の中に持ち込まなく プラトンがこの言い換えによって、 というのは、 つまり、 テアイテトスの考えにおいては、こころの中で「11だ」という把握をしてしまった者 この「7+5=11」という偽なる思いなしを「(実は) 12であるものを、 問題の核心を提示しようとしているのだと理解することができるの 11である る

答えとしての12と、 ラテスの教唆がテアイテトスを再びアポリアの中に引き込んでしまったことは明らかであろう。だが、「5+7」の しくこの差異に気付かなかったことに由来するといえるのではないか。 同意してしまうという事実である (196b7)。そして、テアイテトスが再びアポリアに落ち込んでしまうのは 明らかではないだろうか。 この「12」を、ソクラテスは 判断者の中にあらかじめ存在している12が、その身分を異にしているということは、 ソクラテスはこれを全く無視した議論をおこなうが、 判断者の中に内在している何らかの知として提示している (196b4-6)。このソク そして、彼がこれに気付きえなかった理由は 問題はテアイテトスがこれに簡単に 誰の目にも まさ

まさしく彼がかの論理に捉えられているからだとはいえないだろうか。

かであるように思われる。 偽の記述の可能性を見いだそうとしているのだと考えられる。だが、この重要な示唆も再度アポリアにとらえられて(エン) しまう。 全く考慮に入れられていなかったこの再把握の段階を「思いなし」の記述の中に引き入れ、この把握の失敗の中に虚 が必要とされるということを示唆することなのである。すなわち、そこでソクラテスは、テアイテトス的な理解では かの知を持っているということだけでなく、思考という働きによって、(正しい答えとして) それを再把握する段階 おこなおうとしているのは、この「知っている」ということに二義を設け、「思いなし」の成立のためには単に何ら たことを示唆している(196d6-e7)。そして、その後なされる最後の解決の試み(197a ff.)においてソクラテスが 事実、この直後でソクラテスは、「知っている」という事柄そのものに対する反省の不十分さがアポリアの原因であっ しかし、この原因がテアイテトスがみずからの発想を乗り越えられなかったところに存していることは明ら

ž

- cf. D. Bostock, *Plato's Theaetetus*, Oxford (1988), p. 176.

 ということは確かだと思われる。なお、両者の相違については、ということは確かだと思われる。なお、両者の相違については、
- (2) 代表的な解釈として、W. G. Runciman, Plato's Later Epis (2) 代表的な解釈として、W. G. Runciman, Plato's Later Epis

quaintance' in Plato's *Theaetetus', Mind* n. s. 72 (1963), 259-63., G. E. L. Owen, 'Plato on Not-Being', *Plato I* (G.

Vlastos ed.), New York (1971), 223-267., J. McDowell, Plate

- Theaetetus, Oxford (1973)., N. P. White, Plato on Knowledge and Reality, Indianapolis (1976) などがあげられる。
- (∞) McDowell, op. cit., pp. 194–198.
- (4) このような解釈が可能であると考える論者として、C.J.

Williams, 'Referential Opacity and False Belief in

Theaetetus', Philosophical Quarterly 22 (1972), 289-302., G

70-80, pp. 72-76., Bostock, op. cit. pp. 169-176, 1)6-7 Fine, 'False Belief in the Theaetetus', Phronesis 24 (1979)

- 5) 以上のように解釈するとき、ソクラテスの「思い違い」モ 向性と基本的に同じ方向を向いているといえる。この点につ デルの説明は、ソピステス篇における虚偽の問題の解決の方 いては Fine, op. cit. の考え方に賛成したい。
- (©) Fine, op. cit., p. 72.
- (8)187c7, d7-8 のソクラテスの言葉が第一部で問題にされて (~) Fine, op. cit., p. 77. いるプロタゴラス説へのほのめかしであることは明らかであ
- (9) 学ぶ、忘れるを中間状態とするソクラテスの言葉 (188a1-4) (1861), p. 147., McDowell. op. cit., note on 187c-e

ると思われる。 cf. Campbell, The Theaetetus of Plato, Oxford

は、このことを如実に物語っているのではないだろうか。す

- 態といわれるのである。 な情報が失われ、欠如しているとき、それが「知らない」状 が「知っている」状態といわれるのであり、また、このよう なわち、我々が記憶の中に何らかの情報を蓄えたとき、それ
- .10) これと同様の視点は、すでに今井知正、「偽と不知(一)」 (『人文科學科紀要』第93輯(哲學 XXV)、東京大學教養學

北大文学部紀要

提示されているが、第一のアポリアそのものの読み、および、 なぜこのようなアポリアが提示されたのかについての私の解 部人文科學科 哲學研究室篇、 1989, pp. 139-169) において

(\(\pi\)) Fine, op. cit., pp. 75–76.

釈は異なっている。

- (12) 我々はこの説明を、プラトン的な理論的考察の説明として
- 13) これと同様の議論は、199d ff. にも明確に現われている。「知 ものではないからである。

こころが何らかの確信を持ったとき「思いなし」が成立する 限定する必要はない。というのは、ここで強調されているのは

ということであり、必ずしも長い分裂状態を要求するような

- アから抜け出そうとするテアイテトスに対して、ソクラテス 識」と「無知識」という概念を導入することによってアポリ
- と考えている、すなわち、自分が把握しているものは虚偽で したがって彼は、自分がつかんでいるものを知識であると思 あるのに、それを知っているような気になっているのである。 れば、虚偽の思いなしを持つ者は、自分の思いなしが真実だ しかし、虚偽であるとは思わないのである。

イテトスは再びアポリアに陥ってしまう。すなわちそれによ は「思いの論理」を展開し、これを認めることによってテア

.14)プラトンがこれに気づいていなかったとは考えられない。 たとえば、第一部におけるプロタゴラス説批判において、

プラトン『テアイテトス』第二部における虚偽不可能論

ている。(170c) クラテスは、判断者をそれ以外の人間が観察した場合を考え

(15) 例えば Williams, op. cit. は、このような分析が生じる根底

解が存していると考えている。 には、指示の透明・不透明の区別についてのプラトンの無理

は再び「11を12だと思う」という表現を用いている。

(16)実際、この議論が終るところで(199b3-4)、ソクラテス

(17)このことは、実は「思い違い」の説明において明確に示唆 されていたことであった。cf. 189c1-2 'antallaxamenos tē(i) di-

(18)このことは、これまでの対話が完全にアポリアに終わって

anoiā(i)', c3 'hamartanon hou eskopei'